



図書館はもっと自由に、 もっと面白くできる！



最近の図書館って
面白そう

幸せな 図書館の 設計図

浅野隆夫 著

四六判・230頁

定価2,420円(本体2,200円+税10%)

ISBN978-4-8169-3117-8

2026年9月刊行



浅野 隆夫

あさの・たかお



札幌市図書・情報館初代館長。

1966年東京生まれ、札幌育ち。北海道大学法学部卒業後、1989年に札幌市役所へ入庁。2010年、「まさかの異動」で図書館の世界へ足を踏み入れる。

その後、司書資格を取得し、札幌市図書・情報館のコンセプトづくりから取り組み、2018年の開館と同時に館長に就任した。

「貸出しのない図書館」「課題解決型図書館」として注目を集めた同館は、蔵書4万冊のミニ図書館ながら、開館10か月で来館者100万人を達成。2019年にはLibrary of the Year 大賞・オーディエンス賞をダブル受賞した。

現在はフリーランスとして、全国の自治体で図書館や文化施設の立ち上げ・運営支援、読書活動推進に携わる。講演会や大学での授業を通して次世代の司書・図書館人材の育成にも取り組み、「図書館をもっと自由に、もっと面白く」をテーマに、新しい図書館づくりを全国へ広げている。



札幌市図書・情報館がどのように生まれ、どのように今の姿へと育っていったのか、司書が発案し、開発し、実施していった事柄を初代館長が率直に記述。

推薦のことば

私が公共図書館づくりに深く関わるきっかけが、札幌市図書・情報館での浅野さんのお仕事でした。

正解のない図書館づくりの正解のなさを「不安に思う人」と「楽しめる人」の2者がいるとしたら、浅野さんは間違いなく後者です。

人と情報の接点が著しく変化する現代、図書館をつくる意味と意義を柔軟に、冷静に、愛をもって考えている方だと思います。

ブックディレクター 幅允孝

目次



序章

これまでの50年、これからの50年
—— 図書館がもう一度、動き出すために

第1章

図書館は、
あなたの人生にまだ必要ですか？

第2章

図書館は、空間で生まれ変わる

第3章

貸さない図書館はなぜ生まれたか

第4章

小さな図書館を強くした、
選択と集中の物語

第5章

人に寄り添う本棚づくりとは—
迷ったら、自分の友達を思い浮かべて—

第6章

司書が自分を出す仕組み

現役司書のコラム

その棚の前に誰が立つのか

第7章

開館前に起こっていたこと
— 常識のカバーをはずそう—

第8章

私たちが考える課題解決型図書館とは
— 本棚は、誰かの人生のそばにある—

第9章

最新の情報はどこに？
— ひとのあたまのなかに

第10章

そして声が返ってきた

第11章

いい図書館ってなんだろう

第12章

これからの図書館に求めるもの

特別対談

幅允孝(ブックディレクター)／浅野隆夫

202608

お問い合わせは… 日外アソシエーツ 営業局

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <https://www.nichigai.co.jp/>

注
文
書

幸せな図書館の設計図

定価2,420円(本体2,200円+税10%)

ISBN978-4-8169-3117-8

取扱書店

冊



9784816931178



メインフロアの2階は斜めの動線に特徴

「真ん中にあるのは、本棚じゃなくて『リサーチ』です。」

図書館の中心的なサービスである調査相談を行うカウンターは、ここではあえて「レファレンスカウンター」ではなく、「リサーチカウンター」と名付けました。

「レファレンス」という言葉は、図書館に慣れない人にとっては堅いし、意味がすぐ伝わりにくい。そこで、もっと直感的に「ここで調べられるんだ」と感じてもらえるよう、名前を変えたわけです。

通常、こうしたカウンターは参考資料を背負う構造にするため、図書館の奥に設置されることが多いのですが、この館ではフロアの中央に配置されています。どこからでも見つけやすい位置です。

040

いまから約50年前、図書館にひとつの革命が起こりました。それは「館外貸出」の開始です。かつての図書館といえば、入館票を書いて席に座り、出してもらった本を読み、必要なら本の文字をひたすら書き写すような場所でした。けれど、貸出が始まったことで、図書館は、閉鎖的な場所から、誰にでも開かれた空間へと大きく変わったのです。

貸出サービスはもちろん大好評。図書館の数は他の文化施設に比べて圧倒的に増えました。

しかし、その後「図書館」といえば、無料で本を借りられる場所」というイメージも付き、その後、図書館はしばしば「無料貸本屋」と揶揄されるようにもなりました。

もしかすると図書館の側もいつしか、「たくさん貸す」ことが評価軸になり、人と知が出会う場としての側面は、少しずつ影を潜めていったのかもしれない。

もし、50年前に「貸出」という革命があったとすれば、これからの50年には、「図書館は何のためにあるのか」という問い直しが必要なのではないでしょうか。その問い直しのヒントは、すでに各地の図書館で芽吹き始めています。

私たちはその先例に学ぶべく、全国津々浦々、数十ヶ所を見に行き、勉強させてもらいました。ただ、それらは、既存館での部分的な取り組みにとどまっていることも多く、全館規模での実

本文内容 見本

もっと、本棚を人の想いに寄せないといけない。ただ分類して並べた本棚では、人は救われない。

この実験棚の初日の気づきが、いまの図書・情報館のテーマ棚の哲学、「本棚は、誰かの人生のそばにある」。その原点だったと思っています。

従来型図書館サービスと課題解決型図書館サービスの比較

図書館のあり方は、この数年で重心が移りはじめてるように思います。

「資料をそろえて貸し出す場所」から「悩みや課題に寄り添い、次の一歩を後押しする場所」へ。その違いをおおまかに並べると、こんな感じになります。

観点	従来型図書館	課題解決型図書館
中心機能	資料の収集・保存・貸出	検索・選定・相談・支援
情報源	図書、新聞、雑誌	図書＋人＋データ＋経験＋出会い
成果の指標	貸出冊数、来館者数	行動変容、満足度、地域への波及
館の役割	教養・文化の拠点	実践と変化を支える基盤

図書館を「ライブハウス」にするという発想

もし、さまざまな人が、まるでライブハウスの出演者みたいに、いま考えていること、いま現場で起きていること、自分の経験から得た知恵、こうした生の情報を図書館で語ってくれたら、どれだけ素晴らしいだろう。

でも、図書・情報館には、いわゆる「セミナールーム」がない。

そこで思い出したのが、当時アップルストアでよく行われていたインストアイベントでした。あの、賑わうお店の中で、新製品のコンセプトを語り、実物に触れられて、質問もできる。あの熱狂や一体感は、もはやインストアイベントというより、トークライブでした。

図書館でもあれができるんじゃないか。そう思ったんです。

読むだけじゃない。「観る読書」「参加する読書」

情報って、本から得るだけじゃない。

ひとの声、その場の空気、会話や質問から生まれる気づき、終わった後に誰かとつながること。こういうライブ感で得る情報も、立派な読書体験なんじゃないかと気づいたんです。